

# 隊員活動報告書

派遣国 ニカラグア  
隊次 19年度1次隊  
職種 小学校教諭  
隊員名 小谷知代

第1号報告書（赴任3ヶ月目）の報告書を別添のとおり提出します。

## 1. 配属先の概要

### (1) 事業内容

本校は幼稚部・小学部・中学部からなり、午前は幼稚部と小学部、午後は幼稚部と小学部（一部）、中学部の児童が学んでいる。校長は1人であるが、副校長以下すべての教員が午前の部と午後の部とは別々に分かれている。不定期ではあるが保護者会もあり、PTA活動も行われている。

### (2) 組織図

- ・配属先名 クラリサ・カルデナス・ロペス小学校（人数は小学部のみ）
- ・校長1名、副校長1名、事務1名
- ・教員数 19名（午前 12名、午後 7名）
- ・児童数 574名（午前404名、午後170名）

### (3) 予算状況

- ・年間予算は約44,700ドル。各学級で学級費を集め、学校全体で共有している。

### (4) ボランティアが所属する部局の事業内容および予算状況

上記に同じ

### (5) 所属する部局におけるボランティアおよび同僚の位置づけ

校長、副校長以外の教員は担任、もしくは教科担任（コンピュータ）として勤務している。隊員は全学級に対して算数科の補助教員として指導に当たっている。

### (6) 同僚の技術レベルおよび意欲

これはニカラグア全体に言えることだが、小学生を相手に45分授業を休憩なく3コマ続けるのは難しい。その状況の中、子ども達にうまく気分転換をさせながら内容の濃い授業を展開している教師もいるが、ほとんどの教師は時間割を有効に活用できないまま、メリハリのない授業になってしまっているといった印象がある。ただし、これは先生たちの責任ばかりによるものではないので、学校側との協議が必要である。また、学習規律が整っていないためにせっかく工夫された指導内容も子ども達にきちんと伝わっていない場面も見受けられる。

授業観察をしていると、不十分な指導や間違った指導も見られる。それはサンディニスタ政権樹立以降の1980年代のニカラグアの教員養成状況も影響しているであろうし、教師自身の指導技術を磨くための研修会（校内、校外とも）が不足しているのも大きな原因である。先生たち自身が生活に追われ教材研究の時間がないことやこれまでの指導方法を変えることに抵抗があるという背景はあるが、多くの先生方は研修会や私の提案に学ぼうとする姿勢を見せてくださるし、授業のサポートに入ってほしいと直接声をかけてくださる先生もいる。新たに学ぼうとするのは子ども達だけではないのだと、私自身の活動に責任を感じている。

### (7) 配属先の援助受入実績

平成16年度1次隊として1年9ヶ月、当校で同職種の隊員が活動していた。要請内容も今回と同様に算数科教育における指導・改善を目的とし、同隊員は学級担任のカウンターパートとともに教材の開

発や指導の向上に取り組む他、校内で算数研究会を開催したり、日本文化紹介を行ったりした。また、同時期にレオン市内に複数の同職種隊員がいたため、レオン市教育事務局と連携をとって市内の教育研修において複数回の算数研修会や日本文化紹介を開催した。先輩隊員の活動成果により、本校はもとよりレオン市教育事務局からも受入体制は良好である。

## 2. 配属先のニーズ

### (1) ボランティアに対して期待している内容

- ・算数の教材研究（費用のかからない教材）、授業計画の立案
- ・カウンターパートを中心に、全学級担任とともにティームティーチングによる授業実践
- ・算数指導法の研究のため、校内研修や公開授業の実施
- ・「初等教育算数指導力向上」プロジェクトとの連携

### (2) 当初要請時のニーズからの変更点

- ・カウンターパートが担任ではなく、隊員受入担当の副校長となった。それ以外は特になし。

## 3. 活動計画準備状況

後期が始まったばかりであったので、すべてのクラスを参観できるよう時間調整をしてもらい、全学級での授業観察を始めた。授業観察をしながら、各担任とは個別に対応しながら授業の実施や授業展開の提案、授業の実施、TTとしての支援を行っていく。これはすでにいくつかの学級で始めているが、図形分野や分数など、教員から支援要請の出ている内容を中心に行っていく予定である。

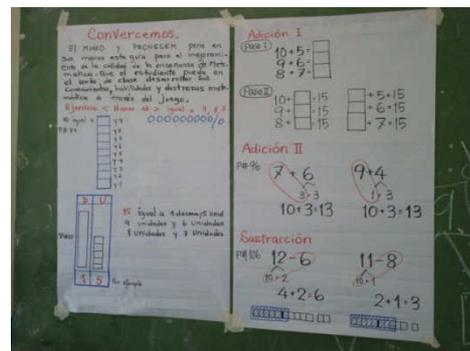
同時に副校長であるカウンターパートと日程調整をしながら、新教科書の活用についての打ち合わせや全職員に対する校内研修会の実施などを計画し、実施した。学校の動き全体にかかわる研修会等は今後も機会を見つけては実施していく予定であり、第2回目は新教科書（新学習指導要領）のポイントや算数科を通してニカラグアの教育の目指すところについて話し合いを持つことになった。

レオン県教育省と連携してPROMEC EMの研修をサポートしていく予定であるし、県内の他の市についても同様である。レオン市内の教員に対する研修会の実施の検討も始まっているが、これについては具体的な内容や日程は決定していない。

以下にこれまでの主な活動を紹介する。

### ○算数研修会（1年担任対象） 8月16日

ニカラグア教育省とJICAの共同制作による1年生の新教科書が7月末に届き、その活用方法について話し合った。ただし指導書は届いておらず、先生たちもどのように使っていけばよいのかわからない状態であった。まず、現在は3年生までの教科書が1部地域で配布されていること、2008年度には3年生までの教科書が配布予定であることを伝えて、年間指導計画の吟味に入った。



これまでニカラグアで使われていた教科書には数の合成・分解という概念が無く、加減法においては数え足しの方法で指導がなされてきたため、高学年になっても指を使って数える子ども達の姿が多く見られる。1年生の新指導要領には10までの数の合成・分解が十分に時間をとって盛り込まれている点が大きな改善点であり、確実な数量理解にとっては適切であると考えられる。ただし、ニカラグアの先生にとっても新しい考え方であるため、どのように指導していくのか戸惑っている先生も多い。ただ当校では、前任者が数の合成・分解がいかに重要であるかを先生方に伝え、研修会を開いていたために先生方の中にはすでに納得できる方もおられた。その指導の際には具体物を用いた指導が有効であることも確認し、日本で使っている教具を見

せ、繰り上がり・繰り下りの計算をどのように指導するのかを説明した。しかし、教師主導型が主流である授業の中で、いかに具体的な操作活動を取り入れるかについては不安が大きい。具体物をどのように授業に組み入れていくのか、授業観察と教材研究とを平行しながら話し合いを進めていくことになった。

#### ○100マス計算研修会及び日本文化紹介（小学部全職員対象） 8月24日

現在使われている教科書には1学年にたくさんの指導内容が組み込まれている。子ども達は一つ一つの内容を十分に習得しきれていないままに授業が進み、それによって次段階の内容も理解できないという悪循環が繰り返されている。もちろん理由は学習指導要領だけではなく、授業の中で子どもたち同士が練り合う活動が少ないことや学習規律が確立していないこと、家庭学習ができる環境に無いことなど、様々な理由が挙げられる。先生方の中には個別指導に対応しようとプリントを各種作成したり、計算競争を取り入れたりといろいろな工夫を取り入れている方も多いが、やはり教材準備に時間をかける余裕はあまりないというのが実情である。

そこで、教具を必要としない「100マス計算」を取り入れてもらおうと校内研修会を開いた。ニカラグアの一斉指導の中で子ども達に九九を定着させるのは至難の業である。100マス計算は個人で取り組めることに加えて、周りの友達と比べる必要が無いこと、目標は過去の自分を超越すること、数分間の高水準の集中が得られることなど利点が多い。その点を説明し、百聞は一見にしかずということで実際に100マス計算に取り組んでもらった。タイムを計り、答え合わせをし、記録カードにそれらを書き込むといった作業を一緒に行うことで、この手法のメリットも確認できた。掛け算以外に足し算や引き算に応用できることも伝えた時の先生方の反応もよかったが、予想通りマスの作成と記録カードの準備が問題となった。本校では算数科では方眼ノートを使うよう指導しているが、肝心のノート指導があまりなされておらず、特に低学年においてはマスを作成すること自体が難しいのだ。そのために「マスの書き方手順」も説明した。研修会以降、複数の先生が早速クラスで実践された。様子を見てみると子ども達も興味を持って取り組んでおり、その集中力はすばらしかった。先生方もその様子に満足した様子である。ただ各クラスに応じて課題があるため、今後もより成果ある実践に向けて調整が必要である。



その後、自己紹介パネルを元に日本の学校紹介、歌やゲームの紹介を行った。内容は以下のとおりである。



- ・ 歌 …「幸せなら手をたたこう」、「誰にだってお誕生日」
- ・ ゲーム…じゃんけん列車、しっぽ取り、福笑い、牛舌ゲーム

特に盛り上がったのは「幸せなら手をたたこう」と福笑い、じゃんけん列車である。歌は早速幼稚部で子ども達に指導したが、子ども達もすぐに覚え、また歌詞を自分たちで追加できる点からも大評判だった。福笑いは道具を貸し出せばすぐにできるし、何よりも1人しかしてないのにみんなが楽しめる点が受け入れられた。全校の前で紹介する機会はなかなかないが、各クラスに赴いて紹介する方法もあると伝えると、すぐに何人かの先生から相談を受けた。子ども達の中にも「授業はいつですか？」と楽しげに聞いてくれるので、算数指導以外でもどんどん活動の場を広げていきたい。

#### ○算数プロジェクト研修会（県内算数科指導主任対象） 9月4日～8日

研修会の主旨は新教科書で示される新学習指導要領の説明と普及である。5日間にわたって1年～3年の内容を中心に各領域を網羅して研修が行われた。研修会では私たち隊員も先生方の前に立ち、技術指導や指導例の提案を行った。特に先生方の苦手とする「図形」領域では多く時間をとり、個々の活動も取り入れて研修を展開した。三角定規やコンパスの使い方など、その使用に慣れないためにうまく使えない様子も伺え

たが、この研修を機に児童への正しい知識教授につなげてもらいたい。

今後は各市へとさらに研修会を広げていく予定であるが、レオン県教育省と連携してそれらの研修会にも参加することとなった。それらは半日の研修であるため各領域にじっくりと時間を割くことができないが、先生方の指導技術向上と子ども達の学力向上のために有効な提案ができればと思う。



#### 4. 任国の印象

レオン市内で生活をしていると、日本人（外国人）である私に対する人々の関心は高いと感じる。気軽に話しかけてくる人もいるし、見つめるだけの人もいる。ただ、こちらから声をかければとても丁寧に対応してくれるし、通りすがりの声に嫌な気持ちにさせられることはほとんど無い。人々に対する現時点での印象は、「話好きで、良くも悪くも細かいことを考えない、明るい人たち」である。赴任直後に学校の近くで死者が20名にも上る大きな自動車事故があった。学校関係者にも不幸があり、私も先生たちに連れられて故人のお通夜に参列した。みんなで訪問し、つらい思いをしている人のそばに黙って寄り添う。態度で相手への思いやりを表現する、それがここの人たちなのだと感じた。人々の生活状況は決して楽なものではなく、時に厳しい表情を見せることもある。人が集まる場所には必ず、お金や食べ物を求める大人や子どもの姿がある。学校に通いながらも、学習用具がそろえられなかったり宿題ができなかったりと、様々な問題で何年も留年する児童がたくさんいる。しかし、人々はたくましく笑う。この国にはまだまだたくさんの課題があるが、子ども達の笑顔を支えられるよう、しっかりと地に着いた活動をしていきたい。

# 隊員活動報告書

派遣国 ニカラグア  
隊次 19年度1次隊  
職種 小学校教諭  
隊員名 小谷知代

第2号報告書（赴任6ヶ月目）の報告書を別添のとおり提出します。

## 1. 活動計画策定までの進捗状況

赴任後3ヶ月目に副校長であるカウンターパートと今後の活動計画について話し合った。2007年は終わりに近づいていたため、活動計画は主に2008年度以降についてである。本年度中は、これまで通り各学級での授業支援を続けていくことになった。計画した内容は所属校だけでなく他の同職種隊員やレオン県教育省にも伝え、情報共有と意見交換につなげている。

## 2. 活動計画の説明

活動目標として、「1. 教員の指導力向上を支援し、児童の学力向上につなげる」「2. 日本に対する知識を広め、交流する」の2点を掲げた。これらは、これまでの活動を通じて配属先や活動にかかわりのある諸機関（主に教育省）から必要とされており、ともに取り組んでいくべき課題であると判断して設定した。以下に目標設定の背景と具体的な取り組みについて述べる。

### (1) 教員の指導力向上を支援し、児童の学力向上につなげる

#### ①校内における算数科研修体制の整備

ニカラグアの学校教育には研究体制というものがなく、校内研究会や研究授業も実施されていない。日本ではこのような機会を通して指導法について話し合ったり、他の先生の方法に学んだり、自分の指導力を向上させたりすることができるが、ニカラグアの担任の先生たちにはそのような機会がないのだ。しかし、同じようなシステムをニカラグアに取り入れるのは難しく、物質的な問題から精神的・感覚的な問題まで、課題が山積みである。

そこで本校の副校長に、教師の指導力向上にむけて継続的に取り組むためには何らかの体制が必要であること、そしてそれを行う上で考えられる課題等について話し合った。副校長はその意義を理解してくださり、2人で授業観察を行い、その後授業者を含めた3人で事後研究を行うという方法で授業研究を進めていこうと話し合った。しかし授業研究に大切なのはその課程である。具体的な支援としては、授業公開に向けて担任と隊員とで授業計画を練り、時には隊員による示範授業も行いながらその単元の教材研究を行っていく。その際、その時間で子ども達につけたい力は何か、そのためにはどのような支援が必要か、学習規律をどう指導していくかなど、隊員は授業経営及び学級経営に必要な要素について支援していく。その上で授業観察を行うというものである。また授業者を含めた事後研究の前には副校長と隊員2人による研究会も持つ。これは副校長自身の指導力を向上することが目的である。これは教育省の先生方と話をした際にも問題点として挙げられたことであるが、管理職や指導主事による指導は高圧的なものが多く、授業者は責められるばかりでなかなか向上心につながらないというのだ。そのため、指導する側にも教師の指導力を伸ばす力量



県教育省研究会にて、先生方と教材研究について情報交換

が必要とされているのだ。2人での研究会を通して、授業観察の観点だけでなく教師をほめて伸ばすことなどについても話し合っていきたい。

来年度にこのような活動ができれば教師自身が主導となって取り組む基盤づくりにもつながるであろうし、隊員の任期終了後も継続して行っていけるものとする。ただし、実際にゆとりのない学校教育現場の中でいかにこの計画を実践し、体制を整えていくかについては不安が大きい。担任の先生たちの立場に寄り添い、本当に有効で有意義な活動となっていくよう努力していきたい。

## ②教員の指導力向上

これまでの校内での活動は、担任の先生からの要望を元に隊員が中心となって授業計画を立て、それをもとに隊員または担任が授業を行うというものであった。中には単元を通して一緒に取り組んだものもあるが、「授業計画を練る」「展開を考える」といった重要な段階を担任の先生と共有できていない点が課題であった。また誰と授業するかも無計画に行っていた。

そこで新年度は、予めどの先生といつごろ組むか予定を立てて活動していくようにと話し合っている。授業計画の立て方や教材研究、学習規律の指導など、子ども達を引き付け、かつ力を伸ばせるような授業作りに一緒に取り組むことで一人ひとりの先生と向き合っていきたい。

## ③児童の学力向上

ここでの教育は教師主導型授業が中心で、子ども達が自分で考える力を育むような授業はなかなかなされていない。計算力や文章読解力などもきちんと身につけておらず、教師がいなければ学習がまったく進まない状況である。しかし知的好奇心は旺盛である。課題だと感じるのは、子ども達が学び方を知らないことだ。もっとよくわかるようになりたいと思っても、どうしたらよいかわからない。だから教師に指示されるのを待っているし、指示されたことしかできない。

6年生の児童に立体の展開図の授業を行っていた際、1人の児童が「習っていないからできない」と言った。それに対して「習うだけではなくて、自分で考えてみよう」と投げかけたところ、クラス全体が盛り上がり、その後3時間の学習の間に子ども達のアイデアがたくさん出された。ニカラグアの子ども達も学びたいと感じているのは同じなのだ。師範事業やTT指導を通してそういった子ども達の支援を続けて学力向上につなげていきたい。



4年生の授業。立体の展開図を考え、実際に組み立てる活動。

## ④隊員自身のスキル



1年生。新しい教科書で学ぶ。

日々の活動の中で日本での教師経験を活かそうと取り組みを続けているが、子ども達の反応や先生方の質問に対応するだけの語学力が十分でなく苦勞することが多い。各学年の教科書の算数用語、発問時の声かけ、指導法についての話し合いなどと話す内容が多岐に渡り、自分の意見を伝えるための語彙が足りず、意思疎通がうまくいかないこともある。しかし授業の中で、また先生たちと話し合う中で学ぶことも多い。任地での活動を有意義なものにするためにも、語学力向上に向けての努力も惜しまず取り組んでいきたい。

## (2) 日本に対する知識を広め、交流する

### ①日本文化紹介

赴任して以来、校内に日本紹介の掲示を続けている。写真や折り紙、あいさつパズルなど小さな子ども

達に興味を持って見てもらえるよう工夫している。直接話す機会が少ない中学部の生徒たちも「掲示を見たよ」と声をかけてくれるなど、間接的にはあるが交流につながっている。2007年度末には日本の所属校の子ども達で作ったカードが届いたので、この掲示を通して子ども達同志の交流にもつなげていくつもりである。

また日本の子ども達との交流も計画中であり、まずはネット回線を利用したテレビ会議で交流をはじめようと試みている。これは日本の学校の先生方の協力があってこそ実現可能な活動である。日本とニカラグアとの時差の関係で子ども達同士が向かい合うことは難しいかもしれないが、2つの国の架け橋となれるこの機会を活動に活かしたいと思う。



世界地図と並べて掲示したところ、子ども達は一生懸命にニカラグアと日本を探してくれた。

### 3. 配属先の動向

2008年度から新しい校長先生が学校運営を行うことが決定した。それ以外の配属先の概要については第1号報告書以降、特に変化なし。

本校では11月23日（幼稚部）、30日（小学校）、12月2日（中学校）にそれぞれ卒業式が行われ、その後12月3日から学年末休業に入り、小学部では全体の約75%が次学年に進級した。新年度は1月22日から始まり、実際に授業が始まるのは2月4日である。年明けから授業始めまでの準備期間を利用して職員会・研修会を開かれる予定である。

### 4. 任国の人々との交流

#### (1) 配属先等任地の人々の日本や日本人に対する意識

多くのニカラグア人にとって日本人と中国人は区別できない。街を歩いていると「Chinita（中国人の女の子）」と声をかけられるが、知り合ってから日本人と知ってからは、声をかけてくる人に逆に注意してくれるほどである。ニカラグアでは以前「原爆展」が開かれたこともあり、日本の歴史や文化に興味を持ってくれる人も多い。日本の宗教や風習、家族観などを話し合っ、自分たちの共通点を見つけては喜び合うのも楽しい。これまでも日本文化紹介の機会があったが、さらにお互いの文化を体験し合うなど、知るだけではない交流（共有）の仕方もしていきたいと思う。

#### (2) 任国の人々との交流

赴任から半年が経ち、日常生活も隊員活動も含めて任地が自分にとって落ち着く場所になった。家族や友達を大切に作るニカラグアの人々と一緒にいて、私に対しても同じように接してくれることもうれしい。しかし言い換えれば人と一緒にいることが好きな人たちゆえに、1人で能率よく仕事をこなすことにはあまり積極的ではないように思える。1人で任地に赴任する私たちとは正反対とも言えるが、一緒に仕事をしたり生活をしたりする中でお互いのよさを取り入れあえることも多いと思う。

学年末休業を利用して任地から出てみると、ニカラグアのすばらしい自然に出会う。そこに「もの」はなくとも人々は力強く生活していて、時間をゆったり使っている。どの人も「ニカラグア人は時間にルーズだ」などと自分たちが問題だと思っていることについて話してくれるが、今すぐに何とかしようとするわけでもない。その明るい笑顔を見るたびに、「幸せに生きること」について考えさせられる。